

Lesson 4 二重被爆 ～ある生存者の人生～

Part 1

- [1] 1945年8月6日、山口 彊^{つとむ}さんは幸福な気持ちで起床した。それは彼の、広島で過ごす最後の日だった。彼は翌日には、長崎にいる家族のもとと本社へ帰ることになっていた。彼は広島の会社で、3か月かけて大きな船を設計していた。
- [2] 任務の最終日、彼は会社へ行くバスに乗ったが、印鑑という、日本人が書類に捺印するのに使う印を忘れたことに気づいた。彼はそれを取りに社宅へ引き返すと、今度は電車で会社に向かった。
- [3] 彼が駅から会社へと歩いていたとき、1機の爆撃機が飛んでいて、2つの白いパラシュートが落ちてくるのが見えた。突然、すさまじい閃光が走り、彼は吹き飛ばされた。

Part 2

- [4] それは原爆だった。アメリカの爆撃機エノラ・ゲイは、山口さんからわずか3キロ離れた、広島を中心地付近に原爆を落とした。彼はしばらく路上で呆然と横たわっていた。(意識がもうろうとする状態から)回復すると、顔の左側と左腕にひどい痛みを覚えた。
- [5] 空を見上げると、大きなキノコ雲が空高く立ち昇っているのが見えた。彼は、可能な限り早くそこから逃げなければならなかったと感じた。野原にある大木のもとにたどり着くと、彼は辺りを見回した。ほとんどの家が破壊されたことに彼は気づいた。そのようなものを、彼はそれまで見たことがなかった。
- [6] もうすぐ正午になろうというところで、彼は同僚に会うために、会社へと歩き続けることに決めた。到着すると、被害を受けた多くの家屋を目の当たりにしたが、生存者が出てきて肩を抱いてくれた。

Part 3

- [7] 山口さんは、防空壕で一晩過ごした後、生存者のための列車が己斐^{こひ}駅から長崎に向けて午後に出発することを知らされた。彼は市の反対側にある駅まで歩き、なんとか席を確保した。翌日、列車が長崎に着くと、彼は病院で火傷の手当てを受けた。
- [8] 8月9日に、彼は長崎の会社に戻った。顔の左側と左腕には、何重にも包帯が巻かれていた。同僚が全員やって来て、広島で起こった恐ろしいことについてひどく聞いた

がった。山口さんが、たった 1 個の爆弾で広島が壊滅したと彼らに話すと、上司はそんなことはありえないと言った。

9 突然、まぶしい閃光が部屋を満たした。山口さんは長崎に生きて帰ってきたものの、そこで 2 個目の原子爆弾を経験したのだった。

Part 4

10 山口さんは、二度の原爆攻撃を生き延びた。ほかの多くの生存者と同様に、彼は人生の大半を苦悩の中で過ごした。しかし、息子が 60 歳で、原爆症によるがんで亡くなってから、山口さんは自らのつらい経験について人前で語り始めた。そうすることが自分の義務だと思ったのだ。彼は自分の経験についての本を書いた。生存者についての映画に出た。90 歳のとき、彼はニューヨークにある国際連合で、次のような演説を行いもした。「私はあの爆弾を 2 度経験しました。3 度目がないように心から願っています。」

11 彼はまた、アメリカ合衆国大統領バラク・オバマがブラハで演説し、核兵器のない平和のために働くことを約束すると、オバマあての手紙を書いた。その手紙には「ブラハでのあなたの演説にとっても感動いたしました。私も残りの人生を、核兵器を持つのをやめるよう世界に訴えることに費やそうと思います。」と書かれていた。

12 山口さんはかつて、未来に関して何か希望を感じるかとたずねられたことがあった。しばらくしてから彼はこう言った。「私は未来に希望を持っています。愛と人間を信じていますから。」と。

13 また彼は、最後の年に「私は義務を果たしました。」とも言った。2 週間後、93 歳のとき、山口さんは長崎で静かに息を引き取った。彼の願いは私たちみんなの中に残っている。